

## 第6回天文教育懇談会報告

去る5月15日午後1時より東大理学部3号館310号室にて開催。20名の参加者があった。まず山田卓氏が「科学館における天文教育活動」について、名古屋科学館の状況を紹介された。

普及活動は2つに分けられる。プラネタリウムによるものは

### I. 一般向け投映

- (1) 今夜の宵空と毎月の話題 ズーム投映器・スカイライン投映器・SCR 調光器・フラッシュ・バックミュージックなどを使って星空への興味を喚起する。
- (2) プラネタリウム・コンサート 夏期の毎土曜日18時30分から20時まで行ない、屋間科学館へ来られない人に星空のもとで音楽を聞かせる。

### II. 学校・団体向け投映

- (1) 科学館のカリキュラムによる投映 6~7月頃、幼稚園児に七夕の話をする。6月と12月には小学4年生に星座の探し方を教える。小学4年生と父兄を対象とする「親子の天文教室」では、夏休みと冬休みに星座早見による星の探し方の実地指導をする。ボーイスカウトに対しては、星の探し方、星と方角など、野外活動に必要な知識をさずける。
- (2) 学校教育の補助として行なう投映 学校の学習内容とプラネタリウムの機能とをきみ合わせ、教師との打合わせによるカリキュラムで行なう。

同好会組織(天文クラブ)によるものは

### I. ジュニア・クラス

- (1) 小学生クラス 小学5・6年生を対象に年5回、日曜日9時からプラネタリウム・ホールで天文の話をする。また年1回、名古屋市公会堂で総会と講演会を催す。
- (2) 中学生クラス 年5回の例会と年1回の総会がある。小・中学生ともテキストをもとに話を進める。

### II. シニア・クラス

(1) 高校生・成人クラス 年10回、毎月第2金曜日18時30分より20時30分までプラネタリウム・黒板・スライドを使って天文の初歩を教える。内3回は天体観望会にあて、ほかに年1回、天文台見学を催す。次に佐藤が「天文教具の検討」というテーマで述べた。天文教具とは天文の理解を助けるための器具であって、それには次のようなものがある。

- (1) プラネタリウム 太陽・月・惑星の日周・年周運動を表わす。歳差運動・彗星・流星も出す。
- (2) 地球儀 地球の自転・公転と季節の変化を示す。

- (3) 3球儀 月の自転・公転と満ち欠け、日月食の理を示す。
- (4) 天球儀 天球の日周運動、太陽・月・惑星の出没時刻と方位が分る。
- (5) 星座早見 天球の日周・年周運動を表わし、星座の同定や天体の出没・南中時刻と方位を知るのによい。
- (6) 月令早見 月の満ち欠けや日周運動、公転が分る。
- (7) フーコー振り子 地球の自転を示す。
- (8) 日時計 太陽の日周運動と真太陽時が分る。均時差の理解にも役立つ。
- (9) 垂直棒(ノーモン) 日影の曲線から真太陽時、太陽高度、日照などが知れる。
- (10) 望遠鏡 太陽・月・惑星面の観測、星団・星雲の観察に用いる。

このほかプロミネンスアダプター、分光器、透明半球天体写真、星図、六分儀、双眼鏡などいろいろある。天文教具として販売されているものもあるが、簡単に自作できるものも多い。天文を一層よく理解してもらうために、天体模型や観測器具の考案・改良と普及が切望される。

発表のあとで行なわれた討論の中から、いくつかの意見がまとまって来た。天文教育は宇宙における自己の空間的・時間的位置を認識させることを、目標とすべきであろう。おもな星座を憶えたり、恒星の進化を学ぶのはその点で意味がある。現在地球汚染と資源枯渇の危機が真剣に叫ばれている。天文学は地球以外に人類の住処のないことを教えてくれた。かけがえのない地球を守るために、天文教育はここに最も力点をおかねばなるまい。

(佐藤明達・平瀬志富)

## 雑 報

### P/Tuttle-Giacobini-Kresak (1973b) 彗星の増光

1973年5月20.9・27.9・31.9, 6月3.11, 7月6.865日(UT)に表記の彗星の増光が世界数ヶ国で観測された。その内5月27.9日の増光は全光度約4等にも達し、増光の幅は約10等にも及ぶものであった。

### 皆既日食中の新天体

ベルギーのドッシン(Dossin)とエック(Heck)は去る6月30日アフリカで起った日食を撮影した2台のカメラによる20枚の写真から $\alpha=6^{\text{h}}52^{\text{m}}0$   $\delta=+5^{\circ}21'$ に2等の新天体を発見した。我が国からも多数の観測者が現地に出かけたが、現在のところその天体を確認したという証拠はない。(香西洋樹)